

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 3 年目)

1. 研究課題

生と創造の探究—環世界の人文学

Exploring Life and Creativity—the Studies of Umwelten

2. 研究代表者氏名

岩城卓二

Takuji IWAKI

3. 研究期間

2017 年 04 月 - 2020 年 03 月 (3 年度目)

4. 研究目的

本研究班は、2015 年度から二年間にわたって行われた共同研究「環世界の人文学」の問題意識と成果を受け継ぎつつ、さらなる研究の深化と発展を目指す。本研究班の基底をなす問いは、人間を含む「生きもの」にとって「生きる」とはどのような営みであるのか、というものである。本研究班の課題は、生きものとその周囲の世界との相互作用と不断の変転に着眼しつつ、生命の持続と創造的な変容の過程を探究することを通して、従来の人文学からの脱皮を目指すことである。本研究班では、「環世界」を単なる抽象概念として扱うのではなく、生きもの相互の「あいだ」や「空気」、さらにはそれらの関係の中で生まれる技術や言説など、具体的な事象に寄り添いながら考えることを主眼に据える。具体的な事例の検討と学際的な議論を通して、本研究班は、無文字の知も含めて生きものとしての人間が培ってきた「生き抜くための知」を多角的に探究していく。

By focusing on the lives, skills, interactions, and boundaries of both humans and nonhuman beings, this research explores a new field in the humanities. This research project, which is based on both philosophical arguments and concrete case studies, investigates the comprehensive issues concerning life and Umwelten. It tackles various critical topics, such as agriculture, natural and man-made disasters, mining developments, religious practices, illness and care, and scientific technology. Through a thorough investigation of the lives of, and the interaction between human and nonhuman beings, as well as of their unique Umwelten, this project seeks to understand the ‘worlding’ of human beings as a part of life on the planet.

5. 本年度の研究実施状況

2017年3月に終了した「環世界の人文学——生きもの、なりわい、わざ」を引き継ぐ本研究班の最終年度である本年度は、昨年度同様に各班員による個別課題についての研究報告を中心に例会を開催した。また、ゲスト・スピーカーを招いた研究会や国際シンポジウムを開催し、人間と非人間的存在の関係、ならびに環世界の形成と変容に関する活発な議論を行った。個別課題研究では、次年度刊行予定の論集を意識して、その各章の統一テーマにあたる「生の理論的考察」、「非人間」、「排出と循環」、「生の実践」について、文学・哲学・科学技術社会論の視座から議論と考察を行い、環世界概念の可能性と限界が考察された。ゲスト・スピーカーを招いた研究会としては、5月に得丸久文氏を招き、「デジタル言語学」という分野を横断した新しい実践について知見を広げ、10月には土屋由香氏を招き、漁業という生の実践を事例としたオーラル・ヒストリー等多様な方法の可能性を考えた。また、11月には一昨年引き続き能作文徳氏を招き、建築や住環境という視座から環世界論を問い直す実践のその後の展開について報告・討論を行った。12月には真鍋祐子氏による文化人類学の観点から画家・富山妙子の作品を考える報告を、新進の若手マルクス主義研究者・斎藤幸平氏に環境論からマルクス主義を読み解く報告を行い、班を超えた活発な議論が展開された。12月には、李 榮敦氏、朴美貞氏を講演者とする国際シンポジウムを行い、韓国・済州島の事例から水と生業、生活の実態に関する報告・討論を行い、学外研究者のみならず、研究者以外の参加者も多く充実した議論が展開された。

6. 研究成果の概要

最終報告書に記載

7. 本年度の研究実施内容

- 2019-04-08 たたら製鉄をめぐる権力と自然—産業維持と自然— 発表者 岩城卓二 京都大学人文科学研究所
- 2019-04-20 人殺しの花 花の誘惑 戦死への誘惑 死へ誘う花 —政治空間におけるコミュニケーションの不透明 発表者 大貫恵美子 ウィスコンシン大学
- 2019-05-13 環世界としての郷土——無意識における循環と再生の論理 発表者 岡安裕介 人文研
- 2019-05-27 デジタル言語学: 言語的人類の脳外(物理層)・脳内(論理層)における三段階知的進化 発表者 得丸久文
- 2019-06-03 ベケットから〈人間と環境〉(そして〈ゴミ〉?)を考える—『しあわせな日々』が唆するもの 発表者 大浦康介 京都大学
- 2019-06-24 まなざしの奪還—メルロ＝ポンティ、ラカン、デュラス 発表者 立木康介 人文研

- 2019-07-08 精霊を待ちのぞむ—中動態としての憑依 発表者 石井美保 人文研コメント
発表者 佐藤淳二 人文研
- 2019-07-22 幽鬼の森の保全:ギニアの人為的景観に見るコンヴィヴィアリティ 発表者 山
越言 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
- 2019-10-28 マグロ漁師が冷戦を変える?—1950~60年代の遠洋漁業と越境性— 発表
者 土屋由香 京都大学 人間・環境学研究科
- Oosa Ryuo and the Anti-imperialist Left's Awkward Relationship with Nature 発表
者 Till Knautd 京都大学 人文科学研究所
- 2019-11-18 寄せ集め・繋ぎ直しの建築 発表者 能作 文徳 東京電機大学
還世界を渡り歩く~そして人類学者は腹を下す 発表者 松村 圭一郎 岡山大学
- 2019-11-25 「密殖」の誕生:英虞湾と京都大学を中心に(1930年代~1960年代) 発表者
シェル・エリクソン 京都大学文学研究科
- 明治中期の産業・政治・皇室一品川弥二郎の諸活動から 発表者 池田さなえ 京都大学人
文科学研究所
- 2019-12-09 海とシャーマン:富山妙子、“魂振り”の絵にみる「海」のシンボリズム 発表者
真鍋祐子 東京大学
- 2019-12-16 水と暮らし—濟州島のふたつの事例から 濟州島の水、魚そしてその利用 発
表者 YOUNG-DON LEE 濟州大学校
グローバル濟州と移住現況 発表者 朴美貞 立命館大学
- 2019-12-23 人新世のマルクス 気候危機とポスト資本主義 発表者 斎藤幸平 大阪市立
大学
- 食糧危機は天災なのか—日本近世の飢饉研究の新視点— 発表者 武井弘一 琉球大学
- 2020-01-20 キリシタン時代の科学と宗教 発表者 平岡隆二 人文研
華北生活用水史試論—井戸とため池をめぐる日常史— 発表者 井黒忍 大谷大学

8. 共同研究会に関連した公表実績

・2019年7月に班員の藤原辰史『分解の哲学 腐敗と発酵をめぐる思考』(青土社)が刊行された。2019年12月16日に、京都大学人文科学研究所において、本研究班の養殖・水資源の利用・人と動植物の関係という成果とをふまえ、韓国・濟州大学校の李 榮敦氏、立命館大学の朴美貞氏を講演者とする国際シンポジウムを行い、韓国・濟州島の事例から水と生業、生活の実態に関する報告・討論を行った。

9. 研究班員

所内

石井美保、藤原辰史、岩城卓二、岡田暁生、小関隆、瀬戸口明久、立木康介、森本淳生、池田さなえ、藤井俊之、岡安裕介、篠原雅武、沈恬恬、日高由貴、平岡隆二、ティル・クナウト、シエル・エリクソン

学内

田中祐理子(白眉センター)、石川登(東南アジア研究所)、伊勢武史(フィールド科学教育研究センター)、山越言(アフリカ地域研究資料センター)、アンドレア百合フロレス漆間(地域研究統合情報センター)、朴美貞(国際高等教育院)、高田翔(人間・環境学研究科)

学外

田中雅一(国際ファッション専門職大学副学長/京都大学名誉教授)、王寺賢太(東京大学)、イリナ・ホルカ(東京大学)、小川佐和子(北海道大学)、足立薫(京都産業大学)、井黒忍(大谷大学)、大浦康介(京都大学)、小柏裕俊(甲南女子大学)、唐澤太輔(秋田公立美術大学大学院)、河田学(京都造形芸術大学)、久保昭博(関西学院大学)、近藤秀樹(大阪教育大学)、斉藤渉(東京大学大学院)、佐塚志乃(トロント大学)、鈴木洋仁(事業構想大学院大学)、茶園敏美(立命館大学)、橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館)、平野徹之(在ドイツ日本大使館)、堀口典子(テネシー大学)、松嶋健(広島大学大学院)、松村圭一郎(岡山大学大学院)、山崎明日香(日本大学)、鈴木和歌奈(大阪大学)、中尾麻衣香(長崎大学)、ロー・シンリン(慶應義塾大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	17 (4)	2 (0)	0 (0)	2 (1)	117 (34)	19 (6)	0 (0)	25 (19)
学内	1	7 (3)	0 (0)	3 (2)	3 (2)	16 (4)	3 (0)	0 (0)	2 (0)
国立大学	7	9 (4)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	22 (14)	12 (12)	0 (0)	7 (7)
公立大学	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
私立大学	9	10 (3)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (5)	4 (4)	0 (0)	1 (1)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0

		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	2	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	5 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)
民間機関	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関	3	3 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (1)	1 (0)	0 (0)	1 (0)
その他	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (5)	1 (1)	0 (0)	0 (0)
計	25	49 (17)	4 (1)	3 (2)	7 (5)	190 (68)	41 (24)	0 (0)	37 (28)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	15(7)
国際学術誌に掲載された論文数	2(2)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
歴史学研究	1	彫り直された伝統:前近代山西の基層社会における水利秩序の形成と再編	井黒忍
Jan Schmidt, Katja Schmidtpott (eds.), The East Asian Dimension of the First World War: Global Entanglements and Japan, China, and Korea, 1914-1919	1	The First World War and Japanese Cinema: From Actuality to Propaganda	小川佐和子

宗教研究	1	セクシュアリティ・ジェンダー体制とその宗教的攪乱: デーヴァデーシーと子宮委員長はる	<u>田中雅一</u>
現代思想	1	アーカイブ的統治とフェティシズムから考える考現学	<u>田中雅一</u>
Birgitte Refslund Sørensen & Eyal Ben-Ari" Civil-Military Entanglements: Anthropological Perspectives" Berghahn Books	1	Crossing over Barbed-Wire Entanglements of U.S. Military Bases	<u>TANAKA</u> <u>Masakazu</u>
世界	1	近代天皇制と「史実と神話」— 代替わりに考える	高木博志

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

13. 次年度の研究実施計画

なし

14. 次年度の経費

なし

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果報告書として『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』(仮題・人文書院 2021年3月刊行予定)の準備を進めている。